



西王母図 木村玉英 (1774- ?)



花鳥図 木村玉英 (1774- ?)

2. 木村玉英筆《西王母図》、《花鳥図》について

西王母図(図版Ⅲ) 木村玉英(1774-?) 弘化2年(1845)冬 72歳

絹本着色・額装 1面 法量82.9×39.7 cm

款記「乙巳季冬 七十二歳女史 雀洲木玉英寫」

印章「玉英之印」(白文方印) 「君華」(朱文方印) 「両楽齋」(朱文長方印・遊印)

花鳥図(図版Ⅳ) 木村玉英(1774-?) 天保3年(1832)秋 59歳

絹本着色 1幅 法量107.4×46.6 cm

款記「壬辰秋日 雀洲木玉英女寫」

印章「玉英之印」(白文方印) 「君華」(朱文方印) 「両楽齋」(朱文長方印・遊印)

本稿は、香雪記念資料館に近年収蔵された《西王母図》(図版Ⅲ)、《花鳥図》(図版Ⅳ)について紹介するものである。筆者である木村玉英(1774-?)は、先行研究において文化期(1804-18)頃に江戸で活躍し、南蘋風の花鳥画を多く描いた女性画家であることが指摘されている¹。しかし、それらは作品解説が主であり、作家自身についてはあまり言及されていない。そのため、玉英について現時点で判明する事項を述べた後、《西王母図》、《花鳥図》に関して考察を行うこととしたい。

木村玉英について

木村玉英に関する従来の研究では、その活動を示す記録がほぼ残されていないとされ、生没年も不詳とされてきた。しかし、後にも述べるように、《西王母図》の款記の一部「乙巳季冬 七十二歳」(挿図1)や、《騰鯉図》(個人蔵)(挿図3)の款記の一部「庚戌季冬 七歳」(挿図4)から、玉英の生年が安永3年(1774)であったことが判明する。また、同じ《騰鯉図》(個人蔵)は嘉永3年(1850)77歳時に制作されたことがわかり、少なくともこの年まで存命していたことが明らかである。先行研究では、《諸家書画帖》(個人蔵)に収められた《白梅小禽図》(挿図5)が紹介される場合が多い。また、計106図の画から構成される、文政9年(1826)市河米庵題《娛心遊目帖》(東京藝術大学大学美術館蔵)における、第92図《蝶図》の筆者が玉英である可能性が指摘されている²。このほか、款記の書体の比較において後述するが、《桃に白頭翁図》(個人蔵)(挿図7)などの作品が現存する³。

ここで、近世の人名録などから玉英自身について確認していきたい。江戸における最初の地域人名録で、当時現存の諸家を姓のいろは順に分類して収めた、扇面亭扇屋伝四郎編『江戸当時諸家人名録』初編(文化12年(1815)版)⁴には以下のようにある。

画 女史 鶴洲

名玉英 字君華 芝片門前 木村家壽子

文化12年当時、玉英は42歳であるが、鶴洲という号で女性画家として活躍していたことがわかる。字は君華といい、芝片門前(現在の東京都港区芝大門2丁目ないし芝公園2丁目付近)に居住し、俗称は木村家壽子であった。

次に、『江戸当時諸家人名録』初編から2、3年後である文化14年(1817)から同15年(1818・文政元年)に成立した、瀬川富三郎撰『諸家人名江戸方角分』(国立国会図書館蔵、筑波大学附属図書館蔵。国立国会図書館本は文政元年当時、大田南畝が所蔵)にも玉英に関する記述が見られる⁵。本史料は、当代の江戸の芸苑の諸家917名を住所の方角に従って分類し、その技芸、通号、別号、俗称を明記した人名録であるが、玉英が居住する芝の部に興味深い事項が記されている。

画家 大朝 理右衛門子 増上寺片門前壺丁目 木村

画家 女史鶴洲梅溪門人 名玉英 字君華 同居 理右衛門娘 木村家寿子

玉英(当時44、45歳)の前項は木村大朝という画家であり、彼は理右衛門なる人物の子で増上寺片門前1丁目に住むというのが、玉英の項には「同居 理右衛門娘」とある。この記述から、玉英の父は木村理右衛門(生没年不詳)⁶という名であり、兄ないし弟も画家を職とする木村大朝(生没年不詳)であったと見なすことができる。さらに、「女史鶴洲梅溪門人」ともあり、玉英が江戸で活躍した南蘋派の画家・鏑木梅溪(1750-1803)の門人であると示されているのである。

鏑木梅溪は、長崎出身の画家であり、唐絵目利(からえめきき・長崎奉行所の職種の一つ。江戸時代、長崎を通して輸入される品物のうち、中国絵画など外国絵画を検閲、鑑定、模写する役職)で御用絵師でもあった荒木元融(1728-94)のもとで絵を学び、淡白な南蘋風の花鳥画をよく描いたことで知られている⁷。名は世胤、世融、字は君胄、子和、号は梅溪、吾軒などで、通称は弥十郎といった。初めは田中氏、平氏を名乗り、江戸における南蘋派の流行を聞きつけて江戸に出、鏑木家の養子となった。後に芝浜松町に移住している。梅溪の作例には、《竹に小禽図》、《樹上小禽図》(いずれも長崎歴史文化博物館蔵)⁸、《花鳥図》双幅、《鴨図》(いずれも個人蔵)⁹、《花鳥図》双幅(神戸市立博物館蔵)¹⁰、《溪亭午翠図》、市河寛斎賛《陶淵明図》(いずれも世田谷区立郷土資料館蔵)¹¹などが知られている。

また、遺墨集である『残雲片水』(文化12年<1815>刊、1帖)には、伊勢長嶋藩の5代当主で南蘋風の絵を得意とした増山雪斎(1754-1819)が題を寄せていることから、梅溪は大名層とも交流があったようである。著名な漢詩人である市河寛斎の二男・祥蔵(鏑木雲潭)を養嗣子に迎え、画業を継がせた。墓所は、三田の長運寺(港区三田)である。『江戸当時諸家人名録 文化12年版』でも物故画家として「○画家 梅溪 名世胤 字君胄 芝浜松町鏑木弥十郎」の記述があり、玉英とも同時期に芝に居住していたことが見て取れる¹²。

玉英が梅溪の門人であったという事項は、管見の限り他の史料には見られない。そのため、師承関係については慎重を期すべきではあるが、玉英に関する数少ない同時代史料の中にこのような記述があることは注目すべきものとも考えられる。梅溪の生没年、玉英の生年によっても矛盾はなく、両者とも居住地は芝であるため、地縁的な関係で玉英が梅溪に学んだ可能性もあり得るだろう。玉英の字「君華」は、字が「君胄」である梅溪から与えられたものかもしれない。

また、幕末に鳥取藩が編纂した『御国残り御道具根帳』(鳥取県立博物館蔵)から、木村玉英筆《牡丹之図》が存在したことが指摘されている¹³。富貴の象徴である牡丹もまた、南蘋派の好画題の一つでもある。さらに、江戸後期より作成された美術家の人気番付である美術番付の一つ「現故漢画名家集鑑」(安政4年<1857>)にも、「閨秀」の項に木村玉英の名が挙げられる¹⁴。このような史料も、当時の玉英の知名度や人気を知るうえで貴重なものといえるだろう。

そのほか、近代以降の画家伝では、玉英については主に『江戸当時諸家人名録』初編を引き、名は玉英、字は君華、通称はやす(弥須)と称し、号は鶴洲であり、文化、文政年間頃に活躍した女性画家であったことがほぼ一様に記されるのみとなっている¹⁵。

《西王母図》(図版Ⅲ)

続いて、《西王母図》の基本情報を述べる。本紙中央に西王母、その左右やや後方に二人の侍童が配されている。西王母は、細かな草や葉、点苔の生える小高い山上から、向かって左下を見下ろすような姿で描かれている。体つきは細身で非常になで肩であり、中国風の衣装を身にまとっている。衣の袖口から肩掛けを掴んでいるため手の先は見えないが、左手を胸前に上げ、右手はやや前方に垂下させている。そして、右足を若干前に出し、裳裾から赤い履の先をのぞかせる姿勢をとっている。

面貌表現は、面長の顔立ちに、墨で丁寧にかかれたうっすらとした眉、切れ長の目、高い鼻、小さな口を持つ。複数に結び上げられた髪は1本ずつ細やかに表され、中央には朱と金による鳳凰の簪、その左右には緑色と墨による瑞雲から、赤、白、青の細かい玉が下がった簪が付けられている。衣には薄緑色の地に緑色

で松の葉のような植物模様が描き込まれ、金泥で葉の周囲がなぞられている。衣の襷も、青地を四角く区切った中に桃色の花があしらわれている。裳は、より薄い緑色の地に唐草のような円模様で飾られている。中央に飾り帯を垂下させ、さらにその上から桃色の腰巻を付け、赤い腰紐が結ばれている。

向かって左側に立つ侍童は、3つの桃が配された赤い盆を両手で持ち、西王母と同じく左下を見下ろしている。面貌や髪型、簪も西王母と類似している。衣は橙色の地に細かい円を連ねた模様が描き込まれ、黒地に金色の二重線で飾られた襟が付けられる。裳は白色であり、青い腰紐が結ばれている。桃は凹凸に濃淡が付けられ、葉脈は金泥と墨で丁寧に引かれている。

右側の侍童は、長い柄が特徴的な扇を掲げ持っている。その顔は他の二人とは異なりやや赤く彩色され、周囲を金で縁取った青色の頭巾と、赤い紐で髪を後方にまとめている。赤い地の衣には金で模様が付けられ、緑色の地に金の二重線のある襷が飾られており、橙色の裳を身に着けている。扇には胡粉と墨などによって瑞雲が描かれている。全体として衣や裳の柔らかな質感が表現されており、質感描写を重視する南蘋風の特徴が窺える。また、髪の中の1本1本や、簪、衣服の模様などが細密に描かれる点も大きな特徴といえよう。

西王母とは、中国の伝説上の女神である。中国古代の地理書『山海経』によると、西王母は崑崙山に住み、豹の尾と虎の歯をもち、髪には勝(しょう・簪)を飾る半人半獣で、天災と刑罰を司っていたという。後に、神仙思想の流行によって理想的な美女へと姿を変えることとなる。西王母のもとには、三千年に一度実をつける桃(仙桃)があり、漢の武帝(前159-前87)に不老不死の桃を与えたという言い伝えも残されていることから、日本においても吉祥画題としてしばしば描かれた。本図も長寿の祝賀などのために、玉英が依頼を請けて描いたものとも推察される。

本紙右上には、款記「乙巳季冬 七十二歳女史 雀洲木玉英寫」、印章「玉英之印」(白文方印)、「君華」(朱文方印)が見られる(挿図1)。左下には遊印「兩樂齋」(朱文長方印)が捺される(挿図2)。款記からは、本図は玉英が72歳という当時としては高齢で描いた作品であることがわかる。また、文化12年(1815)版の『江戸当時諸家人名録』初編からすでに画家として活躍したことが示され、款記の「乙巳季冬」は弘化2年(1845)陰暦12月であり、その年から逆算すると、先述のとおり玉英は安永3年(1774)に生まれたことが知られる。さらに、玉英筆《騰鯉図》(個人蔵)(挿図3)には「庚戌季冬」すなわち嘉永3年(1850)77歳の年記(挿図4)があり、この記述からも安永3年生まれであることが裏づけられる。

本図の形態は掛幅装ではなく、本紙の周囲に幅のごく狭い一文字と、中廻し、柱が付けられた状態で木製の額に収められている。箱書、裏書は無い。

ところで、本図は1枚の絹本に西王母と侍童2人の計3人が描かれる形式である。しかし、管見の限り「西王母図」という画題では、1幅に西王母が単独で描かれる形式や、西王母に侍童(侍女)1人のみが伴う形式の方が多く、侍童が2人描かれる例は比較的少ない。これまで調べた限りでは、江戸時代後期に西王母と侍童2人が描かれる例に、円山応挙(1733-95)、長沢芦雪(1754-99)、奥文鳴(?-1813)らの作品が挙げられるが、いずれも玉英の作例とは構図が異なる¹⁶。一方、玉英と同様、南蘋風の絵画を描いた画家においては、司馬江漢(1747-1818)が複数の《西王母図》を残しているが、いずれも侍女1人の形式である¹⁷。森蘭齋(1740-1801)にも《西王母図》が見られるが、西王母単独の形式で描いている¹⁸。

また、玉英の師とされる鑄木梅溪も、《西王母図》ではないが単身像の《唐美人図》(長崎歴史文化博物館蔵)を描いている¹⁹。玉英筆《西王母図》は、面長の顔立ちに切れ長の目、なで肩で細身の体つき、衣の柔らかな質感や襷の模様などにおいて、梅溪の《唐美人図》に類似するようにも見受けられる。梅溪の南蘋風の絵画が、江戸の地で流行した淡白な画風であったことも影響しているからか、本図も他の南蘋派の絵師による《西王母図》と比べてややあっさりとした画風であり、全体的に明るい印象を受ける。現時点での断定は困難であるが、玉英の《西王母図》は日本へ伝わった中国画や画譜など、基となった図像が写された可能性があり、梅溪から影響を受けた淡白な画風も加味されているのではないかと思われる。また、本図が弘化2年(1845)、72歳時に描かれたものであることから、年を経るに従い南蘋風の要素が色濃い時期から画風が変化していった可能性もあることも考慮に入れておきたい。

《花鳥図》(図版Ⅳ)

本図の箱には、元々「松に呷々鳥図」と書かれた紙が入れている。左下から上方へ伸びる松の木が大きく配され、幹と枝にそれぞれ1羽ずつ、つがいの呷々鳥(ははちょう・ムクドリ科の鳥。ただし、顔が黒、腹が白で、頭や首、羽が青で彩色されることから、日本に飛来する夏鳥のオオルリ〈瑠璃鳥〉である可能性もある)が止まる様子が描かれている。松の幹や枝には、柳の葉が垂下しながら絡んでいる。左下から木の幹が細長く伸び上がる様子がやや頼りなく、稚拙さをも感じさせるが、幹には節や穴までが写実的に表現されるなど、南蘋画の特徴が表れている。幹や枝に墨、緑、茶色で点苔を際立たせる手法も南蘋派ならではのものであり、玉英がその画風を習得していたことが窺える。また、濃墨、薄墨と緑色でとげとげした松の葉の様子が表現され、その上から薄緑色をぼかして葉の茂りを表すなど、入念な描写がなされている。

幹に止まった呷々鳥は、枝に止まるもう1羽を見上げ、赤い舌をのぞかせながら口を開け、何かを話しかけているようで愛らしい。枝に止まる呷々鳥は、羽や尾をびんと伸ばし、鋭い目つきで画面右下を見つめ、獲物を狙っているかのようなのである。青、黒、灰、白、薄茶色を繊細に使い、羽毛の色の微妙な変わり目が精緻に表現され、特に胸から腹にかけてが細やかに描かれている。そこには、黒とわずかな薄茶色でグラデーションが付けられ、胡粉による繊細な線でふわふわとした羽毛の質感が表現されており、ここでも質感描写に優れる南蘋派の特徴が看取される。また、目は外側から薄黄色、墨、赤色、白色、墨の順に重ねられ、くちばしは墨線の内側に白い線を入れている。両足は灰色と墨で交互に彩色され、その爪も鋭く、木にしっかりと止まっている様子が表されている。

羽を広げると白い部分が八の字に見えることなどから吉祥鳥とされるつがいの呷々鳥と、長寿を意味する松、厄除けや強い生命力を意味する柳もまた、南蘋画でよく描かれている。本図は《西王母図》と同様に、おめでたい意味合いをもつ画題といえるだろう。表具は文人表装で、箱書や裏書は見られない。

画面右上に款記「壬辰秋日 雀洲木玉英女寫」、印章「玉英之印」(白文方印)、「君華」(朱文方印)(挿図9)が残される。左下には遊印「両楽齋」(朱文長方印)(挿図10)が捺されている。印章はすべて《西王母図》と同一である。款記「壬辰秋日」からは、本図が天保3年(1832)秋、玉英が59歳時に描かれた作品であることが明らかである。

最後に、玉英画における款記の書体を検討してみたい。

- A. 《西王母図》:「乙巳季冬 七十二歳女史 雀洲木玉英寫」(挿図1)
- B. 《花鳥図》:「壬辰秋日 雀洲木玉英女寫」(挿図9)
- C. 《桃に白頭翁図》:「木村女玉英寫」紙本着色、93.6×28.1cm(挿図7)(挿図8)
- D. 《白梅小禽図》:「木村女玉英寫」絹本着色、24.5×18.5cm(挿図5)(挿図6)
- E. 《騰鯉図》:「庚戌季冬 崑歳女史 雀洲木玉英寫」絹本墨画淡彩、85.5×32.4cm(挿図3)(挿図4)

C. 《桃に白頭翁図》は、右上に款記「木村女玉英寫」、印章は「木邨氏玉英女印」(白文方印)、「字曰君華」(朱文方印)、左下に「両楽齋」(朱文長方印・遊印)が捺されている。本図は、左下から上方に屈曲しながら伸びる桃の木に、つがいの白頭翁(はくとうおう・ムクドリ科)が止まる様子が描かれている。幹や枝は、水分を多く含んだ筆で薄茶色や墨によって簡略な筆致で表され、葉は緑や黄緑色で瑞々しく表現している。花も朱で点々と色づけられ、花弁は薄墨による勢いのある楕円、雄蕊は墨で大まかに描かれている。つがいの白頭翁は、形態をよく捉えており、淡彩で彩色されている。白頭翁は白い頭を白髪と見立てて長寿を表すものであり、南蘋画によく見られる鳥である。

D. 《白梅小禽図》は、左下に款記「木村女玉英寫」、印章は「君」「華」(朱文方印・連印)が残されている。本図は、画面左上から右下にかけて屈曲しながら伸びる白梅の枝に、1羽の白頭翁が身をかがめて止まる様子を描いたものであり、Cと比べても全体的に落ち着いた印象を受ける。枝の樹皮が濃淡による彩色でごつごつと立体的に表され、点苔が所々に描き込まれるなど、南蘋派の特徴的な描写がなされている。また、白

頭翁の羽の色の変わり目に繊細なグラデーションが施されるなど、写実的な表現も南蘋画の特徴の一つであり、玉英が南蘋風の絵画をよく描いたことが見て取れる。白梅と白頭翁の取り合わせは、例えば南蘋派の石崎融思(1768-1846)などの作例もあり²⁰、梅は「眉」と音が通じることから「斎眉長寿」(長寿で夫婦円満)の意を表し、白頭翁とともに同派においてしばしば描かれている画題でもある。

E.《騰鯉図》は、左上に款記「庚戌季冬 崑歲女史 霍洲木玉英寫」、印章は「木玉英」(白文方印)、「君華」(朱文方印)、右下に「風流一家」(白文長方印・遊印)が捺される。本図は、1匹の鯉が波間から身をくねらせて跳ね上がる様子を水墨により表している。波間や、背景に縦線で表された流れ落ちる滝は、わずかに藍色を刷いている。中国の黄河に「龍門」という急流があり、そこを登った鯉は龍になるという「登龍門」の故事から、鯉は立身出世を願って描かれた。南蘋派では、宝暦年間(1751-64)制作の熊斐(1693-1772)筆《鯉跳龍門図》(長崎歴史文化博物館蔵)²¹や、宋紫石(1715-86)らの作例が現存している。うねる波や細かく水しぶきを上げる急流が、墨の絶妙な陰影や曲線によって写実的に表現されており、当時77歳の玉英による熟練した画技が見て取れる。鯉の鱗や鱗なども、墨の濃淡により特徴がよく捉えられている。

款記の書体を比べてみると、AとB、Eは筆にあまり墨を含ませず、かすれた箇所も見られ、全体的にやや無造作に書かれた感がある。一方、A、B、Eと比べてC、Dは文字のかすれも無く、Cは勢いのある書体で、またDはより慎重に筆が運ばれており、A(72歳時)、B(59歳時)、E(77歳時)よりも早い時期の作品であることが窺える。特にCは、全体的に墨付きがよく速筆気味で、印章も他とは異なるため、画風と考え合わせても若年期から壮年期にかけての作品であるように思われる。Dもまた、款記の書体と、南蘋画の影響が他よりも色濃い画風から、比較的早い時期に描かれたものと推察される。

また、CはA、B、Eと同様に「木」の字の3画目が2画目を若干突き出てから左に払われている点が共通している。さらに、A、B、C、D、Eともに「木」の字の2画目と4画目が離され、4画目は本来払うべきものを跳ねるように止めているところが類似している。「英」の字の2、3画目をやや長めにとる特徴や文字全体の形は5作品ともよく似ており、A、B、Cでは6画目の止めがしっかりとして跳ねているようでもある。さらに、「寫」の字のウ冠の、1画目の角度、2、3画目の墨の付き具合や形、4画目以降の形、特に12画目から15画目を横棒に近い形で表す書き癖などは、5作品において同一である。これらのほか、A、B、Eでは「霍」の字の1、2画目の形や、4画目と、5画目から10画目を離しているところ、「洲」の字の隣の崩し方が似ている。

以上のように、書体の特徴を総合的に判断し、本稿にて紹介した《西王母図》、《花鳥図》は玉英の作として問題ないものと見なされよう。

本稿にて紹介した2点は、現存作品が少ない玉英画において、制作年が書かれた落款を伴う点できわめて重要なものといえよう。特に《西王母図》は、《騰鯉図》(個人蔵)と同様、詳細な伝歴が不明な玉英の生年を伝えており、非常に貴重である。先行研究では、玉英は文化期頃に活躍したとされてきたが、今回紹介した2点からは彼女が画家としてより長く活動していたと判断できる。

玉英存命期の史料から、彼女が同じ江戸の芝に居住する南蘋派の画家・鐫木梅溪の門人であったことを提示したが、玉英画が少数であることもあり、絵画における梅溪からの影響を指摘するには至らなかった。玉英の父が「木村理右衛門」、兄ないし弟が文化・文政期に活躍した画家「木村大朝」であったことも示したが、今後はより多くの作品や関連史料を見いだすことにより、師承関係、家族関係の詳細をさらに明確にしていきたい。

江戸後期の上毛出身の画家・金井烏洲(1796-1857)が著した『無声詩話』において、森蘭斎門下の女性画家・町田玉嫺が収録されることが指摘されているが²²、玉英もまた南蘋派の数少ない女性画家として珍しく、きわめて貴重な存在である。今後も玉英の画業についてさらなる調査研究を行うこととしたい。

(実践女子大学香雪記念資料館 学芸員 中村玲)

註

- 1 安村敏信編『江戸の閩画家』板橋区立美術館、1991年、100、101頁。パトリシア・フィスター『近世の女性画家たち—美術とジェンダー—』思文閣出版、1994年、172頁。両書はともに個人蔵の《諸家書画帖》に記載される《白梅小禽図》を掲載している。パトリシア・フィスター氏は本図について「玉英の慎重で細かな筆遣いの鳥や梅花の写実的な表現は、沈南蘋の流儀に従ったものであり、それは三次元的な空間感覚を出すために木の枝の輪郭に沿って濃い墨で黒い影を加えている手法についても言える。彼女の絵の本当に生きているようなその質感は、同じ画帖に収録された他の作家たちの作品に比べてみたとき、より明かになる。」と記している。
- 2 星野鈴解説『娛心遊目帖』小林忠・河野元昭監修『江戸名作画帖全集X 寄合書画帖 文人諸家』駸々堂出版株式会社、1997年、63、183頁。同画帖は市河米庵も入れて総計107人の人物が関与し、ほぼ15センチ四方の絹本の本紙に花鳥、人物、山水が描かれたもの。各々の筆者は、総じて文化・文政頃に活躍し、天保頃に亡くなっている者が多く、住まいは江戸、上方、長崎の都市に集中していると指摘されている。
- 3 また、文政2年(1819)《石榴に鳥鴨図》、同6年(1823)《双鶴図》(いずれも個人蔵)の存在を早稲田大学文学学術院教授・成澤勝嗣先生よりご教示いただいた。記して感謝申し上げます。
- 4 森銑三、中島理壽編『近世人名録集成』第二巻、勉誠社、1976年、13頁。同第五巻総索引・別称索引、勉誠社、1978年、28頁。
- 5 中野三敏解説『諸家人名江戸方角分』近世風俗研究会、1977年、91頁。
- 6 寛延3年(1750)出版の、朝鮮の由来や日本との交渉などを記した『朝鮮物語』(5巻5冊)を著した、芝浜松町1丁目に住む木村理右衛門なる人物がいたが、同一人物であるかは現時点では定かではない。濱田敦『朝鮮物語開題』『朝鮮物語』京都大学文学部国語学国文学研究室、1970年、1-7頁。
- 7 梅溪については主に以下を参考とさせていただきます。
 - ①安村敏信「十八世紀後期江戸画壇の様相—南蘋派の需要をめぐって—」『MUSEUM』430号、1987年1月、19頁。
 - ②神戸市立博物館編『花と鳥たちのパラダイス』神戸市スポーツ教育公社、1993年、103頁。
 - ③千葉市美術館編、発行『江戸の異国趣味—南蘋風大流行—』2001年、181頁。
 - ④世田谷区立郷土資料館編、発行『萩泉翁コレクション—藝に遊ぶ—』2009年、10頁。
 - ⑤板橋区立美術館編、発行『我ら明清親衛隊〜大江戸に潜む中国ファン達の群像〜』2012年、112頁。
 - ⑥長崎歴史文化博物館ウェブサイト内全取蔵資料検索作家解説
<http://www.nmhc.jp/museumInet/prh/colArtAndHisSubGet.do?number=60061&command=author> (2018年1月7日閲覧)
- 8 註7 ③ 95頁。
- 9 註7 ⑤ 65、66頁。
- 10 鶴田武良「宋紫石と南蘋派」『日本の美術』No.326、至文堂、1993年、72頁。
- 11 註7 ④ 10、11頁。
- 12 註4『近世人名録集成』第二巻、7頁。
- 13 山下真由美「『御国残り御道具根帳』翻刻」『鳥取県立博物館研究報告』52・53号、2016年3月、35-68頁。『御国残り御道具根帳』は、当時の鳥取にどのような調度類が保管されていたのかが記載され、表道具、すなわち表向きに使用する道具を網羅した江戸時代の資料。その後の時代の趨勢の中で散逸した大名家所蔵品を知りうる同時代資料として貴重とされる。書跡や絵画、什器、武具や馬具、茶道具、楽器、刀剣、能道具など408件が、1番から9番までにグループ分けして記載されており、玉英作品は6番グループに含まれている。本グループは絵画と書が中心となっており、狩野探幽や常信のほか、土佐派、鳥取藩絵師の作品等の中に、玉英の作品が見られる。6番グループの中では10番目で、9番目は南蘋派の土方稲嶺(1735または1741-1807)。
- 14 瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』里文出版、2000年、17頁。
- 15 執筆者が確認した、玉英に関する記述のある画家伝は以下のとおりである。狩野寿信編、古筆了悦校閲『本朝画家人名辞書』大倉書店、1899年、36頁。沢田章『日本画家大辞典』啓成社、1913年、86頁(芳賀登ほか編『日本人物情報大系』第62巻、皓星社、2001年)。沢田章『日本画家辞典』思文閣、1927年、114頁。松雲堂編輯所編『古今日本書画名家辞典』第12版、石塚松雲堂、1927年、232頁(芳賀登ほか編『日本人物情報大系』第66巻、皓星社、2001年)。杉原夷山編『日本書画人名辞書正編上』改修版、松雲堂書店、1934年、70頁。荒木矩編『大日本書画名家大鑑』伝記上編および下編、大日本書画名家大鑑刊行会、1934年、188頁(芳賀登ほか編『日本人物情報大系』第67巻、皓星社、2001年)および2742頁(同第68巻)。下中邦彦編『日本人名大辞典(新撰大人名辞典)』第2巻、1986年(1937年の復刻版)平凡社、341頁。
- 16 佐々木丞平、佐々木正子編『古画総覧 円山四条派系 1』国書刊行会、2000年、674頁。佐々木丞平、佐々木正子編『古画総覧 円山四条派系 6』国書刊行会、2005年、981頁。三宅秀和「永青文庫 美の扉(51) 奥文鳴と西王母・紅白桃園」『茶道の研究』第57巻3号、2012年3月、1、20-24頁。
- 17 成瀬不二雄「司馬江漢筆 西王母図・桃花図」『國華』第1157号、1992年4月、32-38頁。成瀬不二雄『司馬江漢 生涯と画業 作品篇』八坂書房、1995年、38-39、51、127、157、215、216-217、353頁。註7 ③ 18頁。
- 18 中谷伸生「大坂の南蘋派—森蘭斎の《西王母図》と《桃と薔薇と白頭翁図》」美術フォーラム21刊行会編『美術フォーラム21』第23号、2011年5月、4-9頁。
- 19 長崎歴史文化博物館ウェブサイト内取蔵資料検索<http://www.nmhc.jp/museumInet/prh/colArtAndHisGet.do?command=view&number=142302> (2018年1月7日閲覧)。本図は桜の木を背景に、川で布を濯ぐ女性が描かれていることから、中国・春秋戦国時代の越の美女を主題とした「西施浣紗図」であろう。「西施浣紗図」としては安永2年(1773)の円山応挙の作例が知られている。根津美術館学芸部編『円山応挙—写生を超えて—』根津美術館、2016年、40、41、163頁。
- 20 註7 ③ 49頁。
- 21 註7 ③ 55頁。
- 22 成澤勝嗣「日本の南蘋系画家研究資料」早稲田大学大学院文学研究科編『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』60、2014年、30頁。

謝辞

木村玉英筆《白梅小禽図》、《桃に白頭翁図》、《騰鯉図》は個人のご所蔵家の方々より作品調査、図版掲載のご許可を賜りました。心より御礼申し上げます。

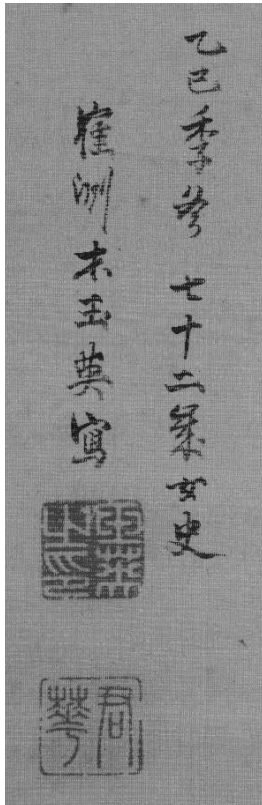


插图1
《西王母图》 款记·印章

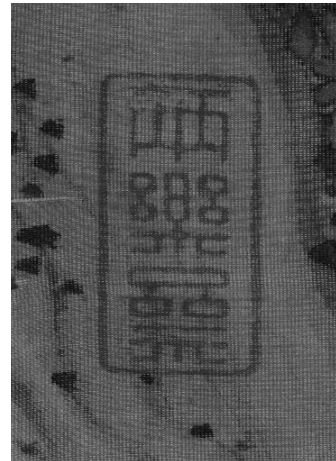


插图2
《西王母图》 遊印

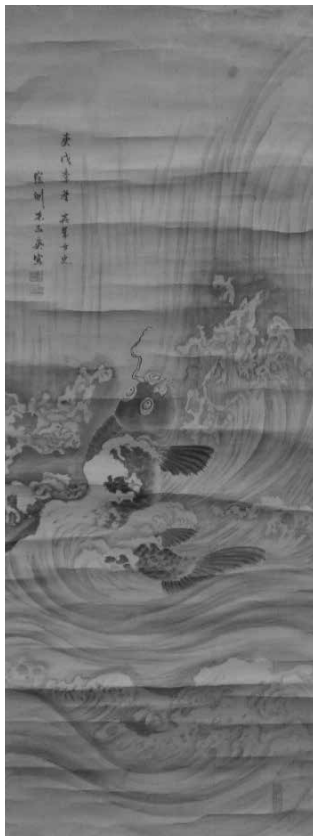


插图3
《腾鲤图》 个人藏

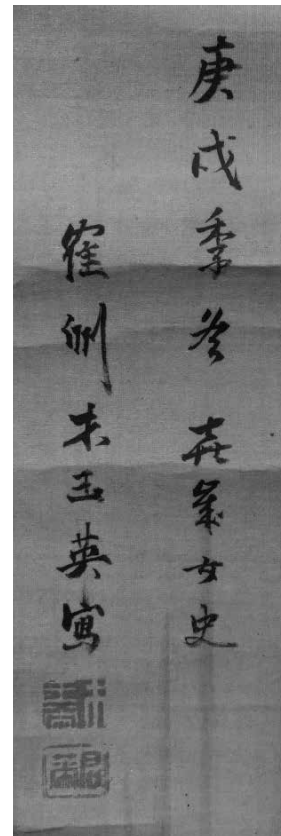


插图4
《腾鲤图》 款记·印章



插图5 《白梅小禽図》(《諸家書画帖》より)
個人蔵



插图6 《白梅小禽図》
落款・印章



插图7 《桃に白頭翁図》
個人蔵



插图8 《桃に白頭翁図》
落款・印章



插图9 《花鳥図》
款記・印章

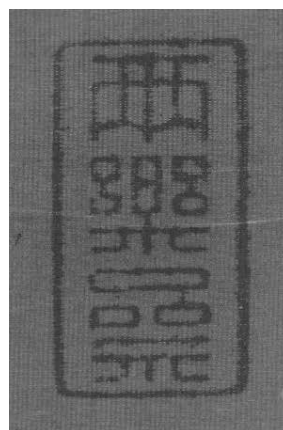


插图10 《花鳥図》遊印